

## 1. むらづくりの主体

- (1) 名 称 らくしやう わぞ  
楽 姓クラブWAZO
- (2) 所 在 地 しもいなぐんおおしかむら おおかわらわぞ  
長野県下伊那郡大鹿村大字大河原上蔵
- (3) 地区の規模 集落
- (4) 組織の性格 地縁的な集団等
- (5) 代表者の氏名、役職
- 氏 名 まえしまくにこ  
前 島 邦 子
- 役 職 代 表

## 2. 地区の概要

総人口	農業就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
1,356人	167人	566戸	24,835ha	220ha	22ha	22,257ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第Ⅰ種兼業農家	第Ⅱ種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
228戸	101戸 (44.3%)	33戸 (32.7%)	19戸 (18.8%)	49戸 (48.5%)	15戸 (14.9%)	19戸 (18.8%)	67戸 (66.3%)
地域指定状況			農業地域類型区分				
昭和47年度 農振指定 昭和59年度 森林整備市町村 都市計画 無			市 町 村		当 該 地 区		
			山間農業地域		山間農業地域		

### 3 むらづくりの内容及び成果

#### (1) 地域の沿革と概要

##### 【大鹿村の概要】

大鹿村は、長野県の南部、下伊那郡の北東部に位置し、東は3,000m級の赤石山脈が聳え立ち、西は伊那山脈に挟まれています。東西に16km、南北に28km、面積は248.35km<sup>2</sup>で、その95%を山林原野が占める峡谷型の山村である。豊かで広大な自然を有する本地域には、南アルプス国立公園、天竜小渋水系県立公園があり、憩いと安らぎを求めて毎年多くの観光客が訪れている。地域の大部分は急傾斜地で、耕地は全面積の約1%と少なく、集落も標高650mから1,150mの間に点在している。気温は年平均9.6度、年間降水量は1,473mmで積雪量は比較的少ない状況である。

人口は、大正14年の5,529人をピークに、昭和36年の災害や昭和39年の小渋ダム建設による集団移住等により流出が進み、平成21年には1,231人まで減少した。また、65歳以上人口の占める割合である高齢化率は51.3%と高く、過疎化、高齢化が進んでいる。少子高齢化の中で、総合的な取組による人口問題への対応が最重要課題である。

産業は、かつては基幹産業であった農林業・建設業が後継者不足等により停滞し、自然に恵まれた本地域の特徴を生かした、観光等のサービス産業が増加傾向にある。

##### 【上蔵集落の概要】

上蔵集落は、村の南東部に位置し、標高1,000mの山間地にある。農地は狭隘で傾斜地が多く、地すべり防止区域であり厳しい立地条件ですが昔ながらの里山を維持している。古くは、南北朝時代に後醍醐天皇第八皇子・宗良親王がこの地区を拠点に征東府を置き、三十有余年暮らしたことから、大河原城跡を始め香坂高宗の墓、重要文化財福德寺、信濃宮神社等多くの史跡が残されている。

上蔵集落の農業は、古くから養蚕や畑作が盛んであった。養蚕については昭和50年ころには衰退し、酪農に転換したが、担い

手不足と高齢化により、酪農家も現在ではいなくなった。畑作では、大豆が味噌用に利用されるため、どの家でもたくさん作付けして各戸で味噌づくりが行われていたが、その技術が消えそうな状況になってきている。現在は、ブルーベリー農家が増加している。

集落の戸数は、昭和30年代までは68戸存在していたが、就労の場がないことや高校や病院、商店が遠くであり生活が不便なため、だんだんと村外へ移住していった。しかしここ10年は、総戸数41戸のまま維持されている。



上蔵集落

#### (2) むらづくりの動機、背景

##### ア 気になる遊休農地

重要文化財福德寺周辺には、30アールの遊休農地が発生してしまいました。理由は、酪農を経営していた方が牧草等飼料を栽培していたが、酪農を廃業してしまい、耕作者がいなかったためである。この状況は、山間部の農地で増加傾向にあった。また、地区の中心であるこの場所は、史跡巡り等で観光客が訪れる場所であり、遊休荒廃化した農地がいつも気になっていた。

このような状況のなか、集落の女性たちがなんとか農地に戻してきれいな景観にできないかと、真剣に考えるようになった。



遊休化していた農地

## イ 農地への復旧

始めは、5人で話をしていたが、話の輪が広がり21名の賛同を得られた。そして、皆で検討した結果、農地を借りて花や農作物を栽培しようと決めた。土地所有者にも了解を得ることができ、「がんばろう」という気持ちが高まってきた。

しかし、5年も遊休していた農地は簡単に元に戻ることはなく、雑草等の株が大きくなっていたり、土が固くなっていたりして作業は困難であった。始めは、無理をして腰や肩が痛くなったりして、作業に出てくれる人も少なくなってきたこともあったが、みんなが元気で楽しみながらできるよう話しながら作業を進めた。

## ウ 楽姓クラブWAZOの誕生

「せっかく人が集まったから名前付けましょうよ。」とみんなで名前を考えることになった。話し合いをするなかで、「みんなが元気で楽しみながら助け合って百姓しよう」と先に目標ができ、楽しみながら百姓するのだから活動団体の名称を楽姓クラブ上蔵にしたらどうかという提案があったが、ちょっとおしゃれに上蔵を英語に変え名前が決定した。

みんなが元気で楽しみながら集う場所、お茶を飲みながらいろんな計画を立てる場所、いつまでも助け合って元気に暮らす場所として誕生した。

## エ お堂のやかた建設

農作業等実施し話し合いが進む中、「自分たちがお茶を飲んだり、観光客と気楽に交流できる施設があったらいいね」という話がでてきた。どうしたら施設ができるかみんなで検討をしていたら、「男集に作ってもらえばいいじゃん、大工さんもいるし、山には木がいっぱいあるし。」お父さんたちをお願いすることになった。これが、集落の話題となり集落全体での取組となった。財源は県・村の補助金と集落の寄付金及び木材の無償提供によりほとんどが材料代だけで済んだ。作業は慣れないことが多く悪戦苦



お堂のやかた

闘した日々が続きましたが、「なんとしても自分たちで造りあげよう」と集落の絆が深まった。また、作っていく中で完成したら直売及び農産物の加工や交流事業をしようと意志決定された。

平成16年6月に着工し10月に完成した施設は、「お堂のやかた」と名をつけ、楽姓クラブだけでなく集落の拠点施設として開設された。

### **(3) むらづくりの推進体制**

「楽姓クラブWAZO」は上蔵集落の女性有志により組織され、自主的に活動をしている。クラブ員は21名で重労働のときやイベントには家族等も参加し、集落ぐるみの活動を行っている。

楽姓クラブは、花部会と農産物部会に分かれていて、花部会は日本で最も美しい村連合大鹿推進協議会と連携し、村道に花の植栽を行い、農産部会はJA女性部と連携しJAで直売を行っている。また、農作業では、大鹿小学校と連携を図り、体験学習として指導も行っている。

30代から80代と幅広い年齢層の集まりであるが、年齢に応じた自分のできる役割を担っており活性化活動に貢献している。

### **(4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況**

#### **ア 農産物生産と販売への取組**

遊休農地であった30アール土地には、比較的管理のしやすい村特産の中尾早生大豆やこきび等雑穀類を栽培し、村内の旅館や豆腐店・直売所へ販売している。この販売がきっかけで旅館では他の野菜も購入してくれることとなり、楽姓クラブが農産物の受入れ窓口となり、集落のだれでも拠点施設お堂のやかたへ農産物を持っていけば売れるという流通経路が完成した。

自家用に栽培し余って捨てていた野菜等も売れるようになり、今まで多く作りすぎて捨てていたものがお金に換わるようになったことから、少しであるが農業所得の向上につながっている。

#### **イ 今後の取組**

この集落は、昭和50年代からブルーベリー栽培が始まり生食用として、農協に出荷されていた。熟しすぎたものは、出荷できないため処分していたが、現在、乾燥ブルーベリーの商品化を研究中である。

また、大豆を栽培していることからこの大豆を使って昔ながらのみそづくりを行い商品としての研究に取り組んでいる。

### **(5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況**

#### **ア 環境整備面の取組**

福德寺周辺にツツジやパンジーを植栽したことがきっかけで、活動の輪が広がり道路や荒廃地の環境美化にも意欲が高まってきた。「おらの地域はおらの手で」を合言葉に、道路への植栽、里山整備隊と協力して荒廃地の草刈、花桃の植栽等すべて手弁当でおこなわれており参加者に意識の高さが伺える。大鹿村は、日本で最も美しい村連合に加盟しているが、この集落の取組はまさにその模範である。その甲斐あって、近年、村への観光客の増加がみられることとなった。

## イ 都市住民等との交流 雑穀まつり

都市住民や村内住民との交流を図るため毎年 11 月に収穫際として実施している。雑穀類や野菜の直売・こきびの餅つき・そば打ち体験・楽姓汁（きのこ汁）の無料配布、間伐材を使った木工教室を行い、来てくれたかたをもてなした。

この心温まる取組の甲斐あって、過疎が進行する大鹿村へ、上蔵地区に魅せられて、村外から 2 戸 3 名が移住してくるという結果につながった。



雑穀まつり

### 4. むらづくりの特色及び優秀性

上蔵集落が位置する大鹿村は、長野県内でも特に生活条件の厳しい地域であり、過疎化・高齢化が著しく進んでいる。そのような状況の中、上蔵集落の女性達が立ち上がり、地域づくりに取り組んだ結果、魅力ある地域づくりを実現するとともに、住民の地域に対する意識の向上、産業振興、学童教育への寄与といった、集落内にとどまらない大鹿村全体の活性化に貢献している状況にある。また、村を訪れた域外住民に対する心遣いにも力を入れるなどホスピタリティー溢れる精神は、地域の活性化を図る上で大切なものとなっており、この取組が、地域にとってよりよい方向へ進んでいる要因のひとつとなっている。